

五十二 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その三

園丁 さあ、一息ついたので先へ進みましょうか。

莊周 ちょっと待って。君は、判断の論理形式とカテゴリーまで来て、認識についてだいぶ分かったつもりで先を急ぐようすに見えます。でも、思惟の主観的条件が対象の一切の認識を可能にできるのかどうか、得られた認識がどうして客観的妥当性をもつと言えるのか、考えましたか？。それなしに事物を認識できたと安心できますか？。

園丁 えっ、……。それはむしろかしい注文ですね。

莊周 この際、それも考えてみるべきだと思います。邯鄲の人が夢で一生を味わい尽くしたのに、気がつくともまだ粥は炊けていませんでした。たいして時間はかかりません。

園丁 そうですかー、僕には大仕事だと思えますが。再度カントに聴くことにしましょう。一か月ぐらいお待ちください。

C カントの認識論が唯物論的でモノの認識へ向かうこと

園丁 おかげで勉強になりました。カントが狭く認識だけを考えたのでないことを改めて

知りました。彼以前の哲学者の考察を乗り越えようと奮闘したのですね。

問題は、人間の獲得した表象とその対象とが合致し、必然的に関係しているかどうかでした。それが確実でなければたしかに安心できません。常識は対象が反映して表象になると考えるわけですが、対象と表象との関係は経験的・帰納的にしか知りえないのですから、その関係が必然だと言い切れません。経験主義はすべてを保証することをせず、懐疑主義は疑問符をつけました。ロックもヒュームも、結局、純粹概念を経験から導かざるをえず、純粹数学と自然科学が客観的認識を与えることに適合することができなかつた、とカントは考えます。そこでカントは、認識を確実に進めることができるような理論体系を構築しようとしたのですね。その方法は、感性和悟性の形式およびカテゴリーを認識の始原に据えて、それらをア・プリオリ（先験的）だとすることでした。これが人間の経験を可能にするア・プリオリな条件・原理であると言うのです。そうすれば、表象から対象へ遡上することが可能になります。コペルニクスの転回という意味はこれなのです。カントは、人が対象から認識を得るといふ常識的な現実を重々承知の上で、認識の主体の側に立とうとします。その場合にだけ、人間は、自分の認識したことに疑惑を抱かず、慎重に、進むことができるのです。もちろん、表象が対象を産出するのではありません。

実在する人間は、対象を直観することができて、自分がつくり出す概念によって対象を思惟することができます。その際、人間の心意識に先験的にある直観の形式は、対象の形式に対応していて、対象を直観的にとらえることができるのだと思います。さらに、人間の悟性は基本的な判断の論理形式と純粹悟性概念を経験に先立って具えていて、それらは現象の生起の仕方に対応することができて、関係する概念を抽出・彫琢しながら最適な論理系に組み立てられるように計算・考量して、対象の構造・関係を理解することができると思います。この言い方は強すぎるでしょうか？。そう考えれば、カントのオペルニクスの転回は唯物論に反対していないのです。ここで経験に踏み込めば、生物学が僕の解釈を支持すると思います。人間は、進化の歴史の恵みを享けて、自然（世界）に適合する感性と悟性の運用形式を生まれつき具えている、と考えることができます。それは、いつかまた考えてみたいと思います。

莊周 また、科学を持ち込むのですか。

園丁 しかし、僕の言い方は自然科学に依拠しているのではないと思います。

莊周 そうでしょうか？。

園丁 カントは、「人間が外界を認識することが可能だ」ということを説明できる理論を構築するために、最大限のことをしたのだと思います。それでも、出発点に原理という

言葉を使わざるをえません。僕は、物理学で使用される原理という言葉を思い浮かべました。アインシュタインの相対性理論は相対性原理と光速度不変の原理の上に築かれました。光速度不変は観測（経験）を普遍化したものですが、相対性原理の方は論理的に考えて最大の普遍性をもつ真理と考えられます。それでも、相対性理論は原理を基盤に構成され、原理を保証するものはないのです。自然科学は経験科学ですから、理論の真实性を保証するのは最終的には観測です。観測に合致して矛盾が現われないなら、わたしたちはそれを確実な認識だと考えます。

それでは観測の支えを必要としない、その意味でア・プリアリと言える数学はどうでしょう。わたしたちはユークリッド幾何学や数論は完璧な理論だと考えます。ところが、二十世紀になって、ゲーデルが不完全性定理を証明しました。自然数論を含む帰納的公理化可能な理論は、無矛盾であるなら、自己の無矛盾性を証明できない、ある種類の無矛盾下で証明も反証もできない命題が存在する、というものです。数学でもそのようなのですから、人間の理性が構成できる理論は、究極的な保証をもちえないことになるでしょう。望めるのは自己矛盾を含まない体系を構成することだけです。

現代のこれらの知見からして、カントは認識論をぎりぎりまで推し進めたのだ、と僕は思います……。僕にせいっぱいのことをしましたから、このくらいでがまんしてい

ただけませんか。

莊周 蝶も似たようなことしかできないでしょう。カントが構築する純粹な認識の理論をさらに聴くことにしましょう。

園丁 カテゴリリーについての説明が続きますが、カントは、思惟や認識の働きについて、言葉を確認しながらさまざまな考えを述べます。およそ結合であればそれは悟性の作用にほかならない、その悟性作用に綜合という名称を与えよう。分析はじつは結合を前提しているのだ」と。また、われわれは、前もって結合しておいたものでなければ、客観において結合されていると考えることができない、と認識の機微を語ります。そして、「わたしは考える」という意識を根源的な統覚と名づけ、ア・プリオリに結合する能力である悟性は、また、直感における多様な表象を統覚によって統一する能力であるといいます。この統覚の統一という原則こそ人間の認識全体の最高の原理なのだを確認するところで、カントの認識論はデカルトに接触するのですね。しかし、身心二元論的な議論はしません。カントは、始終経験を越えることはしないし、経験的な実在論者でもあるのですから、認識論の枠組みにとどまってデカルトの身心二元論を克服しようとしているのですね。

莊周 それはたぶん一般的なカント理解でしょうね。

園丁 選びそこなうかもしれないませんが、認識を知るうえで大事だと思った言明を拾い挙げてみましょう。客観とは、与えられた直観における多様なものが一つの概念によって結合させられたところのものである、とされます。そして、意識の統一が、表象（概念）の結合に必要であり、表象の客観的妥当性の根拠だと言われますが、ここは僕には明確に理解できません。また、認識は与えられた表象がある客観に対してもつところの一定の関係である、という言明があります。ほかに、対象を思惟することと対象を認識することは同じでないという指摘がありました。その項目のタイトルは、「カテゴリーは経験の対象に適用されうるだけであってそれ以外の物の認識には使用できない」というものです。ここで、カテゴリーが物の認識に使用されるのは物が可能的経験の対象と見なされる場合だけに限る、と書かれている文が目につきました。追加して、われわれの感性的でかつ経験的な直感だけが概念に意味と意義を与えうる、と説明されます。

「感官の対象一般へのカテゴリーの適用について」という項目で内感が考察され、もう一度、考える「わたし」が取りあげられます。そこで、われわれは、自身の主観をこの主観がそれ自体であるところのものに従って認識するのではなくて、これを現象としてのみ認識するのだ、と言います。「わたし」は現象としてしか自分を知ることができ

ないのです。この考え方だと、身と心とを分けてとらえる二元論にはなりませんね。「わたし」についてのこの認定は、物自体は知られなくて現象を認識するだけだ、という言い方と同じです。

莊周 うん、君のカントを唯物論的に解釈するという立場は、微妙なところにさしかかりましたよ。「わたし」という主観が現象だとすることを君は承認するでしょうが、物自体は知られないというカントの言明はあなたの唯物論的解釈と考えているものと矛盾し、とげとして刺さったままではないですか？。

園丁 うーん。

莊周 とどめを刺しましょう。自然における現象の法則が悟性とそのア・プリオリな形式とに一致・調和することを、カントは言葉を尽くして論じてきましたが、しかし、現象は物の表象にすぎない、物自体はどのようなものであるにせよ、われわれに知られぬままに存在している、としか言いません。人間は、表象としての現象の法則しか認識しない、ということになりませんか？。この立場は、君の唯物論と一致しないのではありませんか？。

園丁 あなたに問い詰められて、僕はあれから必死に考えてみました。誰よりもかつちり

と理論を組み立てるカントは、人間が確実な認識を着実に始めるのだとできるように、その始まりのところで感性のとらえる現象をよく判らない物自体から切り離したのでした。突き詰めると、それが妥当だったかどうかが問題でしょう。人間の認識では現象を考究し尽くしても物自体を知ることではできないのか、という問いに言いなおすことができると思います。

庄周 わたしは、君と君の夢に出る蝶にはむずかしすぎる課題を突きつけたのですね。まあ、できるだけのことをやってみてください。

園丁 はい。カントは、力学の例からして、人間が解明して一定の段階に到達した自然科学の認識を確実だと考えています。そこから問題を考えてみましょう。感性をつかさどる感覚のまっ先に挙げるべきものは視覚ですが、視覚は光によって得られます。光は、太古から人間の最大の関心を引き、現代物理学でも最も根源的な基本粒子です。この光を取りあげて問題を考えましょう、光について得られた結論はほかのモノにも敷衍できるところから。

光はほかのモノを見ているときには視覚をもたらす媒体ですが、遠い星を見ているときには、わたしは光以外のものを見ているのではなく光を直接とらえていると思います。ところがカントの言い方では、直観がとらえるのは光自体ではないことになります。で

すが、それ以上分割できない自然の要素というデモクリトスの表現が今も許される光については、奇妙に聞こえます。わたしは、分節不可能な対象が外界のほかのモノと関係せず直接知覚される、と考えます。わたしが得たのは光そのものではないのでしょうか。対象を光と呼ばずになぜ光の現象と言うべきなのでしょう。

庄周 その議論には頭のいい人が反論するかもしれませんが。もっとさまざまに論じてください。

園丁 それでは、光の科学的認識についてもっと考えてみます。もともと、人間の視覚の器官が、光の「分量」を判定でき、色彩で「性質」を区別できます。科学的に調べるようになって、プリズムで色分けしてそれらの相対的「関係」を知り、見えない光の「あり方」まで知り、…、というふうにして今では膨大な知識になっています。僕は、この認識の発展がカントの言うカテゴリーと判断の論理的形式の運用によって達成されたことを承認します。

今ではわたしたちは、光が電子などほかの基本粒子に吸収されて消失し、飛んでいる基本粒子が光を発生させることを知っています。そういう光を、現代物理学（素粒子の標準模型）は、量子力学の法則に従ってほかの基本粒子と相互作用して生成・消滅する、

と記述するのです。その記述はほとんど完成していると考える物理学者が多いでしょう。それでは、光自体を認識したのでしょうか?。「光とは何々である」と最終的に言い切れるでしょうか?。ところが最新の物理学は、標準模型の基本粒子に重力粒子まで加えて、「超対称性をもつ弦理論」をつくろうとしています。そして去年、重力波が観測されました。重力子という仮説的だった概念は経験的なものと認定を受けたのです。超弦理論が正しいとなると、光は「ひも」であるということになります。でも、「ひも」とは何でしょうか。わたしたちは、光自体をどう理解すればよいのでしょうか?。

莊周 おや、君の考察は方向を変えましたよ。君は、先ほどの自問を考えなおさなければならぬですよ。

園丁 本当にそうですね。遠い星から来る光をわたしが見るとき、光自体を理解していると言いつけることが困難に思えてきました。そうすると、人間の感性では物自体は知られないというのが科学的な事実でもある、ということになるのでしょうか?。

園丁 もう一度考えを組み立てなおしてみましよう。光自体を認識したと言えるのは、次の文の○を過不足なく知ったうえで、「光とは○である」と言い切れたときでしょうか。そこで、光とは何かと現代人に訊ねてみましょう。すると、「光とは電磁波である」と

いう答えが返ってきそうですが、それで納得しなければ、さらに「何か」と問わなくてはなりません。「ひもだ」と答えられても困ってしまうわけです。すぐわかるようにこの問答は果てしなく続くことになるでしょう。言葉によって、つまり概念によってある事物を認識する営みはこのようなものです。どんな辞書もこの言い換えでできていますね。ですから、あるモノ自体を完全に認識することは、概念の体系全体を知って関連する概念の関係をすべて知ることによって達成されるのです。本来、概念の完全な規定はそうやってできるのでしようね。

言葉遊びをするとはあなたにしかられそうですから、物理学が実行している認識を考えてみます。一般に、物理学は対象とするあるモノについて実験を設定しそれを観察してそのモノに関する認識を得るのですが、実験は、モノをほかのモノと相互作用させて、その分量・性質・関係・様態を観察するのです。自然科学は、モノとモノとの関係に注目し、また、分量・性質・関係・様態は現象と言えますから、モノの示す現象を観察してモノの認識を深めるのです。ところが、モノとモノの現象とのあいだには概念的なずれがあると認めざるをえません。カントは、自分の据えた認識の枠組みが現象を扱うようにできているので、論理的にモノ自体を区別した、と考えることはできないでしょうか。

莊周 君は、認識は広い意味での事物の關係を知るためのもので、それによって構造や状態や性質などを識るのだ、と言っているように聞こえます。

園丁 そうだと思えます。光に戻れば、わたしたちは光がどういふモノかほとんど十分に知ったと思うけれども、物理学は、「光が何である」とは言わずに、光がどのようにふるまうかだけを記述するのです。物質全体を考えると、分子・原子が識別され、原子の構造が解明され、分子の構造が解明され、…、…と連続するこれまでの歴史で、物理学は、物質が何層もの階層をなして存在すること、それぞれの階層にあるモノがそれを構成する要素のあいだの相互作用をとおして一定の構造を形作ることを明らかにしてきました。これは論理的な問題というよりも経験的な事実ですが、それぞれの段階で、構成要素の物自体が解明されたと言えるかどうか疑問に思います。今まだ、一番下の階層の基本粒子を超弦理論によって統一的に説明しようとする段階です。その超弦理論が検証されたとして、そのトポロジカルな「ひも」自体を知ったことになるのでしょうか？

僕には、自然を構成する物自体を認識したと断定することができません。

このような物理学の進展を知らなかったカントが「物自体は知られない」と言うのは、むしろ、人間は認識の彼岸への到達を完了できないという、人間の認識についての原理的な「判断」だったと考えるべきだと思います。今ごろそれを確認するとは遅すぎます

が、その判断が三つの『批判』書の基礎にあつたと納得しました。

莊周 うーん、わたしたちの問答の重大な節目ですよ……。よろしい、わたしもその判断を受け入れましょう。認識の彼岸へ渡り終えることの「断念」ですね。ここまで言い切れば視界がはっきりします。ただし、勇気が要りますね。

園丁 あなたにそう言っていただければ、勇気が持てます。自然に関してさえ認識の彼岸へ超越ができないとすれば、人間の実践を含めて一般に理性の運用において、理性の限界を知って経験からの超越を戒めるべきだということが得心できます。カントの哲学というのは、別の言葉で言えば、断念の哲学なのです……。

この断念は、ゴータマ・シツダールタが形而上学的問い「宇宙は永遠か否か、魂と肉体は同一か否か」に答えず、「アートルマンの存在」を主張しなかつた態度に通じるのではないのでしょうか？。

莊周 重なるところがあると考えられます。でも、全体が似ていると短絡せず、継続して考えてみてください。

園丁 とまかく僕は、認識に果てしがないとしても、超越せずにカントの哲学の立場を保つてこの世界に立ち向かおうと思います。そして、カントの先験論的哲学を唯物論的な

哲学だと考えたいと思います。人間の認識が現象の法則と一致してそれを知ることができるのだとすれば、知り得た現象の法則はモノの法則につながっている、と考えることは許されるのではないでしょうか。実際、カントは、因果の系列をどこまでもさかのぼるといふような言葉づかいをしますね。彼岸へは渡れないとしても、人間が認識を追求することを勧めているのだと思います。僕は、現象を担い手であるモノから切り離さず、現象の認識がモノの認識に接近できるといふ要請を置くことにします。そうして、三浦さんの主張に反対して、カントの認識論は唯物論的だし、不可知論でもないと思えるわけです。

莊周 君は、認識の始めではなく終わりの方から問題を考えました。両方の問いが同一であるか確かではありません。ですが、君の努力を認めて、君の要請をわたしたち二人の原理とすることに賛成しましょう。そうして、わたしたちの問答を続けることにしましょう。

園丁 ありがとうございます。ああ、疲れました。続きの対話は、元気が回復するのを待ってください。